

# Un éloge des cambrésiens

山本 成生

ドキュメンタリーや実話に基づく作品で何らかの賞を受けた映画監督ならば、その受賞スピーチにおいて、題材となった実在の人々への感謝を忘れることはないであろう。指導教官や研究上お世話になった方々への謝辞は他所である程度述べさせていただいたので、ここでは本年度のヘレンド賞の対象となった拙著『聖歌隊の誕生』（知泉書館、2013年）の舞台である、カンブレーについて触れたいと思う。

私がカンブレー大聖堂を検討対象に選んだことに、研究上の戦略はほとんどなかったと思う。そこはギョーム・デュファイやヨハネス・ティンクトーリス、ヤコブ・オブレフトといった中世末期からルネサンスにかけての著名な音楽家が多数在籍していた「重要な音楽拠点」であった——というのが音楽史研究における定説であり、その検証は拙著の重要なテーマとなるが、不器用な私が最初からそこまで考えていた訳ではなかった。むしろ、カンブレーの歴史自体の魅力が、私を研究の世界へ導いていったといえる。

フランス語圏でありながら、久しく神聖ローマ帝国内に位置していた都市カンブレーの「境界性」は、11世紀のコミュン運動、16世紀のイタリア戦争（「カンブレー同盟戦争」や「貴婦人の和議」）、そして20世紀の第一次世界大戦（「カンブレーの戦い」で戦車が初めて本格的に導入された）など、西洋史の要所要所でその名を刻む。「人」についても同様である。「三身分論」の重要な提唱者の一人であるジェラルド・ド・カンブレー、大シスマ期に最も影響力をもった教会人であり、文化史的には「中世の知識人」と「ユマニスト」を繋ぐ存在ともいえるピエール・ダイイ（樺山ゼミで「ダイイは面白いけど、刊行されているものが少ないんですよ」と言われ、何故か誇らしくなったしまった）、『テレマックの冒険』や女子教育論で著名なフランソワ・フェヌロン、フランス航空界の父であるルイ・プレリオなど——決して多くはないが——西洋史で欠くことのできない傑士が、この小さな町から生まれ、あるいはそこに関わった。少し大きさに言わせてもらえば、私にとってカンブレーは、コンパクトな歴史教科書であり、全体と局所を繋ぐ結節点であった。

そのなかでも魅力的であったのは、建築物としてのカンブレー大聖堂である。現在のカンブレーに、この教会の遺構はまったく残っていない。フランス革命期にいく

つかの不幸が重なり、19世紀初頭にはほとんど廃墟と化してしまっただからである。しかしながら、『画帖』で有名な13世紀のヴィラルー・ド・オヌクールやヤン・ブラウらによる16世紀の都市鳥瞰図、あるいはルイ14世の従軍画家として著名なアダム・フランス・ファン・デル・ミューレンなどによって多くの図像が残されており、さらにジャック・ティボーを始めとする建築史研究の成果から、その形状をある程度正確に掴むことができた。まだロマネスク期の影響を受けているため、一塔しかない鐘楼と小ぶりのティンパナムからなる正面、それへの反発からおそらく14世紀以降に加えられた、鐘楼と同程度（約40メートル）の高さをもつ派手な八角形の尖塔、やはりロマネスク的な低くシンプルな身廊、そして放射状礼拝堂と飛び梁・扶壁がダイナミックに展開するいかにもゴシック的な後陣、これら複数の要素が小さな空間に凝縮するこの司教座聖堂は、あたかもカンブレーの歴史そのものであった。

さらに、この教会はその姿を消し去る代わりに、貴重な記録を残してくれた。詳述はできないが、この教会の参事会関連の史料群は、その量と質において、フランスの他の教会のそれを遥かに凌駕し、15世紀後半になれば、聖歌隊のほぼ毎週の動向を探ることができる程である（音楽史に限らず、例えばユグ・ヌヴェーのような精密な経済史研究も、カンブレー以外の素材では困難であったと思われる）。未刊行の古文書を読む作業は確かに骨が折れたが、そこではフランソワ＝ドミニク・トランシャンという人物の援けを得た。18世紀の礼拝堂付き司祭で、参事会図書室の司書をしていた彼は、その生涯を膨大な古文書の整理とそれに基づく地方史的著作の執筆に費やした。その記録は私にとって欠くことのできない道標であった（トランシャンは革命期に「聖職者民事基本法」への宣誓を拒否し、断頭台の露と消える）。

前述の通り、第一次世界大戦の際に戦車戦の場となったこともあり、現在のカンブレーに往時の面影はほとんどない。「中世の町並み」を売りにする著名な観光地の歴史なり文化を研究している人を、羨しく思う時たまにある。しかし、「音楽」という目に見えないものの歴史的なあり方を探求する私にとって、カンブレーは確かに、ひとつの *prédestiné* であったのかもしれない。末尾ながら、このカンブレーとそこに関わったすべての人々に、感謝の意を捧げたい。